

全てを放り投げてたどり着いた湖  
（みずうみ） 幼馴染がそこにい  
て・・・・・・・・

ゾンビのような顔をして通勤列車の中、サラリーマンOLた  
ちは眉間にしわを寄せスマホを触っている。

皆仕事で疲れ果てている。それは俺も同様である。

窓の外を、キリンのように首を持ち上げて伸ばし見つめなが  
ら、こんな人生は嫌だと嘆く俺。

早めに手を打たないとこのままではどんどん・・・・・・・・。

俺は全てを放り投げてしまうことにした。

夜8時半。帰宅後すぐバッグを床の上に落とし、そのまま財  
布だけを持って家を出た。

こんなことをするのなんて俺だけではないかなどと過(よぎ)ったりもした。

ゆくあてはない。

ただどこかへ逃げることだけがぼんやりと漠然と頭の中にあっただ。

これで全てから解放される。。。。。

根拠もないそんな開放感で心が一瞬だけ晴れやかになる。

一瞬だけのことだと分かっているわけではない自分がいる。だけど嬉しかった。

切符はもちろん片道。列車に乗り込んだ。

帰ることは頭になかった。

どこかへ・・・。

とにかく行くということ。

それ以外は考えないように首を振った。

最終列車は速度を上げた。

夜は更け、街は少しだけ静寂を帯びている。

窓の外の色が少し視界に入る。

心の中にもわずかな心地良さが入ってきた気がした。

街灯や星空が美しい。

何も見えていなかっただけか・・・。

安心が生じ始める。

俺の脳裏にとある湖がよぎった。

昔友人たちと泳ぎに海水浴に行った湖だ。

季節は冬はじめ。

肌寒い湖を堪能しよう。

途中の駅で下車しインターネットカフェに一泊した。

(体験版は以上になります。ご読了ありがとうございます)